











# はたらく百景

Hataraku-Hyakkei

## 「お金のために働く」ということ

今秋は「賃金」に対する議論が例年になく活発になされることになりました。過去最大級の引き上げ幅となった2021年度の最低賃金。これに対して「雇用か賃上げか」という経営者側からの問題提起がなされた折も折、最低賃金の上昇と雇用の悪化に必ずしもつながらないとする論文を発表したデビッド・カード氏がノーベル経済学賞を受賞しました。

一方で国内では首相交代や、総選挙の過程で、「富の分配」に関する議論が活発に行われてきました。そして多くのエコノミストが指摘しているのは、日本の賃金水準の国際的な低さで、他のOECD加盟国との比較における賃金水準の相対的な低迷ぶりを示すデータが各所で引用されています。賃金が低く抑えられていることの弊害が、あちこちで語られています。

なぜ日本では賃金が上がらないのでしょうか。ひとつの要因として、非正規雇用者、非組合員の割合が増えていることが指摘されています。労使交渉の範疇からこぼれ落ちてしまう立場の労働者が増え、経営者と個人の間で賃金が決まってしまうから、ということです。

労働力を提供する働く側が、自身の給与が不当に低く抑えられていないか。もう少し意識的になる必要があるのでしょうか？ 一人ひとりが自身の賃金に敏感になって働くということが、景気の好循環につながるのです。「お金のために働く」という原点に立ち返ることも時には必要に思います。



### 編集後記

2022年1月から、65歳以上の高年齢者で2つ以上の会社に就業する労働者（所定労働時間を満たす）について、希望があれば雇用保険に加入できることになりました。該当者がいる可能性がある場合は周知を図りましょう。

※編集後記の記載内容は今後の掲載を約束するものではありません。